巻頭文解読

巻頭文解読

いまゝでの本では、大阪の各務千歳只一人整骨術
に志し、木をもつて人骨を造つたという。
それで骨の概畧を知ることにより関節窩臼のし
くみを悟り、極接治療上の役にたつた。
尚整骨新書も著した。図画はすべて和蘭書に
したがつて細いところが研究されいまゝではそれに
基いて世に医学書が販売されていた。
我が大州外科医官鎌田正澄は諸国を巡り紀州
の華岡青州翁に出あい教えを受けたのでそれから
大いに技倆が進み瘟を解剖、瘤を切り、跛行者は
伸びいざりは起きる等によりその名は世に知れ亘り

遠近の患者は踵を接して大勢四方より集って治療を求めたが未だ医療の難しさを悟り知識の向上に努力を重ね、完全治療の目的のため病理の解明に努めていた。

たま〱弘化四年の冬、断罪人（首切人）あり、正澄同志五六人と相談して、その死体を請けてこれを剝ぎ、臓腑の位置と生理解剖の理を内察した。医生の観覧者五十余名。その中で実際の人間の構造を見て知ったのである。骨を摘出するためには釜を使って蒸してむき去り皮膚筋膜の付着せるところは洗浄して数十日さらしてこれを櫃中（箱の中）に保管して研究者の資料に供した。

関節の構造、組織、臼杵の作用、屈伸状態等の

究明により君療する上に大いに役立つことができた。
それで更に画家を呼んでその凡てを写させて
遂にこの小冊を造ることができたのである。
その精細なることは隅々まで筆の遺らざるは無し、
大略は医書に踏襲するといえども、正澄その偉
業は医学上一大貢献を成したのであった。
正澄私にこれはその概略を書いたのであると云っ
ているがその業跡を共に喜び合い私が知っている
ことを認して巻首のことばと致したい。

弘化三年初夏

岩井重克題書

解剖執刀

松澤載清　樋口量春

鎌田新澄　松岡公正

岩井重長　糸川維寧

東武川越

中島玄覚国光

前橋図書館長　萩原進先生解読

朝日新聞報道　牛込久雄蔵書

曩には浪花の各務子徴単(ひと)り整骨術に意(こころざ)し、木造を以て人を為(つく)ると云う。全骨発明、関節窠臼之機は以て撫按治療の用に便す。更に整骨新書を著わす。図画は総べて和蘭書に拠り微細を究む。以(よっ)て世に刊行する者久し。我大洲外科医官鎌田正澄は箕裘を継ぎ初めて業を紀の華岡翁に受く。爾来伎倆大いに進む。瘍を割(ひら)き瘤を截(き)り、跛者は伸び躄者は起つ。此に於てか名、私に達し、遠近の請治者受業者四方より踵を接して絶えず。愈々更に稽(かんが)え、治未登

No 1

明せざるは期を将来に効し孜々として勉めて舍かず。去年乙巳（弘化二年）の冬刑人有り。正澄同志五六人とこれを謀り其屍を請て之れを剖き臓腑の位置と伝輸製造の理を内察す。医生観者五十余人、其機筈を知る。夫れ骸骨の如きは釜甑を以て之を蒸し、剖去り其皮肉筋膜の附着せる者は潔浄せしめ数十は累す。諸を櫝中（箱）に蔵し学者明解を得るに便す。實莢節[illegible]杵、屈伸動用の機、而して治術の便是に於てか出ず。更に画工をして腹部正忠を

図せしめ、遂に一小冊を成す。微密巨細、筆の遺らざるや、其古を踏襲する所ありと雖ども、然して亦正澄善意の厚実は後学の一大奇賜ならざるか。正澄予に其概略を記すを請う。予や辞せず、其鄙衷喜びて其知る所を識し以て巻首に貽るのみ。

解剖執刀　松沢載清　樋口量春

鎌田新澄　桜田公正　岩井重長

糸川維寧

弘化三丙午歳初夏　岩井重克題書

No2.

東武川越

中島 宗覚圓光

昭和〃〃年五月

前橋図書館長

萩原進先生 解読

新訳者 群馬縣前橋市大友町三ー三

中辺久雄

電 二一一 五三八二

郵便はがき

前橋市石倉町三一六

牛込久雄様

東京都杉並区荻窪
四ノ一八ノ一五
片口良子

167

医療法人財団 啓明会
中島病院
理事長
院長 中島 穣

病院 埼玉県戸田市下戸田一一七二番地
電話蕨(0484)(41)一二一一番(代)
自宅 埼玉県戸田市下戸田七七六番地
電話蕨(0484)(42)五一四五番

乱文おゆるしくださいませ.

過日は、お忙しいところへ お邪魔申しあげました.
はからずも、曽祖父の遺されました 貴重な資料を.
拝見させていただきまして 誠にありがとうございました.
そして あのように お大切に ご保存いただけましたことを
幸せに存じました. 近いうちに 九十九里海岸に隠居
しております 両親にも 報告に行ってまいりたいと存じます.
次々に追いかけられまして 御礼申しあげますのが、たいへん
おそくなりまして 申訳なく お詫申しあげます. ごめいそう.
名古屋に来ております. (昔の名刺の住所は表示変更前のものでした)
末筆から御奥様に およろしくお傳えくださいませ。

かー之.

朝日新聞

昭和44年（1969年）5月22日 木曜日

江戸時代の解剖書みつかる

前橋の接骨院

江戸時代の末期、埼玉県川越市で町医者による医学解剖が行われ、内臓や骨格を精密に写しとった「各骨真形図」と題する貴重な医学書が前橋市内の接骨院で見つかった。弘化三年（一八四六年）刊行のものを安政五年（一八五八年）に模写したものだが、前野良沢・杉田玄白らの有名な「解体新書」が出てから七十二年後、医学解剖はまだほとんど行われていないころで、県内でこの種のものが見つかったのは初めて。

見つかったのは、前橋市石倉町で接骨院を開業している牛込久雄さん(五三)宅。牛込さん宅は代々接骨院で、最近実家を改築した際荷物の中から見つかり、正確さにびっくりしたという。

心臓などの内臓をはじめ、手足の関節まで、和紙に毛筆でていねいに写しとった二十九葉（五十八ページ）からなる解剖書で、弘化二年の冬、刑を執行された死刑囚を医師五、六人で執刀したとの説明があり、解剖には五十余人の医生が立会った。

執刀者として松沢蔵清、樋口量春ら六人の名前が記され、中島玄覚国光という人の著らしいが、どういう医者たちで、川越のどこで解剖したかにはふれていない。

牛込さん宅は当時から接骨院を開いており、何かの機会に医者仲間からゆずり受けたものではないかという。

伊東俊夫群馬大教授（解剖学）の話では、内臓や頭骨はともかく、首から下の骨格はほとんど正確で、呼び方も現在でも使われているものが多く、観察方法や描き方などから見て西洋医学をかなり学んだ人たちではないかという。

小川鼎三順天堂大教授（医史学）の話 当時すでに解剖は行われていたが、川越でもあったというのは初耳だ。現物を見ていないので細部についてはわからないが、貴重な資料で、ぜひ一度目を通したい。

「各骨真形図」の一部

その偉業は今日に至るも輝きを失わない。

Not correct.